

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15K04352

研究課題名（和文）大学教育のグローバル化と潜在的キャリア教育に関する研究

研究課題名（英文）Study on globalization of university education and hidden career education

研究代表者

新谷 康浩（SHINTANI, Yasuhiro）

横浜国立大学・教育学部・教授

研究者番号：10345465

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：これまでメンバーシップ型との親和性が強いわが国の大学教育では、IT分野などの職業志向の強い専門教育であっても、地位指標が重視されていた。近年のジョブ型教育改革によって行為の指標を明示化しようとする過程においても、地位指標が重視され続けた。そこからわが国の大学教育はメンバーシップ型の原理を強固に内在しつつ、グローバル化しているという戦略があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、旧来の日本的雇用モデルを超えてキャリア教育・職業志向の強い専門教育と外部社会との接続を、実証的に検討しようとした。その結果、日本的雇用モデルの強固な規範が、ジョブ型モデルにおいても残存していることを明らかにした。この研究は、教育から職業への移行分野の研究において現在着目されているジョブ型教育改革推進の限界を示すものである。批判的な検証によってこの分野の研究の発展に寄与するものである。

研究成果の概要（英文）：In Japan's university education, which has a strong affinity with membership-type education, even in professional education with a strong vocational orientation such as in the IT field, the position index was emphasized. The position index continued to be emphasized in the process of clarifying the action index by the recent job-type education reform. It was clarified that there is a strategy in which Japanese university education shows that it is globalized while firmly retaining the membership-type principle.

研究分野：教育社会学

キーワード：教育社会学 ジョブ型 メンバーシップ型 キャリア教育 地位 行為

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

教育のグローバル化に伴って、スキルやコンピテンシーなどの研究が行われており、キャリア教育にもジョブ型(濱口 2013)労働市場に対応した実質化が求められるようになってきている。一方で我が国のキャリア教育は、日本的なメンバーシップ型(正社員中心)の労働市場を前提とした職業移行準備教育である(岩木 2006、新谷 2010、児美川 2013 など)。コンピテンシーなどにみられる能力を顕在化しようとする取り組みには2つのひずみがある。ひとつは、これまで教育社会学を中心に明らかにされてきた潜在的カリキュラムなどの部分が見落とされる点である。実質化のもう一つの歪みは、それがもつ意図せざる結果である。労働市場のグローバル化が進む理工系では、工学部の高専化(新谷 2012)などにみられる教育内容の洗練化がもたらす意図せざる結果が生じていた。

これについては、顕在的な部分だけを見たのでは不十分であり、教育の担当者がどのような捉え方をしているのかなど、潜在的な部分に焦点をあてることによって検討する必要がある。先の基盤研究C(代表新谷康浩)では、教育問題の社会学と職業地位達成の社会学の観点から、潜在的な教育の中でも「非就労」へのまなざしに焦点をあてることによって、これまで検討されてこなかった就労/非就労の境界が多様であることを示した。さらに多様な就労/非就労の境界を分ける基準として「地位」と「行為」の2つの軸が確認できた(新谷 2014)。理念としてのキャリア教育は「行為」を涵養するが、我が国の多くのキャリア教育は結果的に正社員という「地位」獲得を目標・評価指標になりがちである(新谷 2014)。

これは新谷 2010 とも整合性のある知見であり、キャリア教育が潜在的にドメスティックな労働市場を前提としていることを示している。行為が目標・指標とされるグローバル労働市場とは異なっていた。

ドメスティックな「地位」への水路づけは、正規雇用を想定しない分野でもみられた。芸術系においては就労/非就労の境界が特殊であり、そこでは正規雇用を想定できないゆえに、PBLを通して就労へと仕向けようとしていた(眞鍋 2013)。

### 2. 研究の目的

教育のグローバル化に伴って、キャリア教育もグローバル労働市場に対応することが求められているが、我が国のキャリア教育は日本的雇用システムに適合的なものであった。本研究では、キャリア教育がこの両者をどのように内包しているのかを、潜在的な部分まで含めて明らかにする。

これを検討することで、キャリア教育がグローバル、ドメスティックのいずれの労働市場に適合的であるのかを探る。これはキャリア教育と外部社会との接続を、旧来の日本的雇用モデルを超えて検討することができるものでもあり、一枚岩として捉えられがちなキャリア教育の実像の多元性をより詳細に明らかにすることをねらいとしている。

### 3. 研究の方法

キャリア教育研究会を核にして、大学のキャリア教育を対象とした質問紙調査と聞き取り調査を行う。先の科研で行ったキャリアテキストの再分析により、分析の鍵となる概念である「行為」と「地位」の指標を抽出し、それを質問紙調査の項目に活用する。質問紙調査では、各大学が潜在的に持っている「就労の基準」や「行為」/「地位」志向を析出するために大学のグローバル化志向の度合い、キャリア教育とグローバル化推進の担当部門の連携、キャリア教育の組織上の位置づけなどを探る。その分析結果をもとに大学をタイプ分けし、タイプごとに聞き取り調査を行う。聞き取り調査の分析にあたり、「地位」と「行為」に着目してキャリア教育の潜在的カリキュラムを析出する。それを通して、グローバル化がキャリア教育の中にどのように浸透しているのかを検討する。

### 4. 研究成果

各大学のキャリア教育や専門教育が潜在的に持っている「就労の基準」については、グローバル化以前については「行為」を顕在化した教育を例外的なものとみなしていた。本研究で扱った事例としては、学校とメンバーシップの関係を検討した。学級担任の規定を確認することによって、現在規定上では必要ない学級担任が日本で当然視されていることから、特定の「行為」に収斂されない学校教員の仕事として学級担任が主要な仕事になっていることが「地位」を想定したものであることを指摘した。また、わが国でジョブ型に近いとされる職業としてエンジニアを採りあげ、そのエンジニアの職業キャリアにとって「限定的な行為」を想定したジョブ型教育の効果を検証した。その結果、かならずしもジョブ型とされる教育であっても、ジョブ型教育自体が評価されていたわけではないことを明らかにした。第一に、高専卒女性の満足度を検討した際に、ジョブ型として活躍することよりも、学生時代の学内の諸活動への満足度が高専教育全体の満足度を規定していた。このことから、現在進められているジョブ型教育改革の目指す方向が卒業生の満足度を高めていたわけではないことを明らかにした。第二にITエンジニアの学修成果指標をオーストラリア等のグローバルな指標と比較した結果、日本のITエンジニアのマトリクス指標は、第四次産業革命を想定した高度な職種を想定しているではなかった。日本では限定的な「行為」のジョブ型を下請けとしてとどめており、管理職という「地位」指標だけを高度化と読み替えていた。これらのことから、わが国でジョブ型とさ

れる職業の専門教育においても、「地位」を重視したメンバーシップ型の原理が主体となっていたことを明らかにした。

グローバル化以降の事例については、科研期間中に聞き取り調査などをすすめており、研究成果をまとめる途中段階にあるが、そこで明らかになったことは、グローバル化が叫ばれるようになっても、キャリア教育の中で扱われていたグローバル化はこれまで同様にドメスティックな原理を前提としたものであり、一人で海外に出て行って働くことは例外的な位置づけとされていた。インバウンドへの対応や日本企業のグローバル化に対応できるという限定的な「行為」を追加することで、これまでの幅広い「行為」が地位につながるというメンバーシップ型原理を補強するものであった。そしてそれをグローバル化した教育とみなしていたことを明らかにした。このことは、グローバル化によってジョブ型に切り替える可能性もあったわが国の専門教育やキャリア教育が、メンバーシップ型の原理を強固に内在化しつつ「グローバル」に見せているという教育側の戦略があることを示している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 古賀稔邦、新谷康浩	4. 巻 17
2. 論文標題 ケーススタディ IT分野における訓練パッケージ開発の方法論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 九州大学第三段階教育センター成果報告書	6. 最初と最後の頁 43-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新谷康浩、古賀稔邦、船山世界	4. 巻 18
2. 論文標題 IT分野におけるレベルディスクリプタについて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 九州大学第三段階教育センター成果報告書	6. 最初と最後の頁 69-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新谷康浩	4. 巻 8
2. 論文標題 高専卒女性の学びに見る短期高等教育への示唆 満足度に着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 短期大学コンソーシアム九州紀要	6. 最初と最後の頁 5 - 12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新谷康浩、眞鍋倫子	4. 巻 8
2. 論文標題 教員の職務の無限定性とジョブ型教育改革のねじれ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育デザイン研究	6. 最初と最後の頁 33-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新谷康浩	4. 巻 7
2. 論文標題 職業地位達成の問題構成 芸術系・人文系のキャリア教育に着目して	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 教育デザイン研究	6. 最初と最後の頁 33-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新谷康浩他	4. 巻 22
2. 論文標題 IT分野のマトリクス改訂について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 第三段階教育研究センター成果報告書	6. 最初と最後の頁 46-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 眞鍋倫子	4. 巻 62
2. 論文標題 専門学校教育とジェンダー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育学論集	6. 最初と最後の頁 83-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 新谷康浩、眞鍋倫子、猪股歳之
2. 発表標題 大学のキャリア教育と雇用との関係 就業形態の推移に着目して
3. 学会等名 日本教育社会学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	眞鍋 倫子  (MANABE Rinko)  (00345323)	中央大学・文学部・教授   (32641)	
研究 分担者	猪股 歳之  (INOMATA Toshiyuki)  (60436178)	東北大学・高度教養教育・学生支援機構・准教授   (11301)	